

いた。そんなとき、ホームホスピスの先駆けである宮崎市の施設「かあさんの家」を知り、すぐに足を運ぶと、お年寄り一人ひとりが「ここが私の家、私の居場所」と、前向きに暮らしている姿があり、感銘を受ける。樋口氏は「自分もこのような活動に携わり、世の中に広めたい」と定年前に退職を決定。「NPO法人たんがく」を立ち上げると、2011年には久留米市初のホームホスピス「たんがくの家」を開設した。

たんがくの家では、看護師や介護士など、専門のスタッフが交代で24時間常駐し、入居者をケアすることはもちろん、病院や他の介護施設で受け入れを断られた人も積極的に受け入れるなど、「最後まで看取る」ということに対して徹底した姿勢を貫いた。また、入居者だけでなく地域住民も参加できる陶芸教室などを開き、人々の多様な交流を創出すると、地域住民から「たんがくがあるけん、安心してこの地域で暮らせる」という期待と信頼を得るようになった。樋口氏の地道な活動が地域の人々の理解につながり、入居希望者が増えるなど、2013年には施設を拡大。さらに、古民家を利用した、デイサービスや宿泊、訪問看護・介護を提供する複合型サービス施設「上村座(かんむらざ)」を開設した。同新施設は近隣で暮らす人や学校帰りの子どもたちが気軽に立ち寄れるコミュニケーションの場となり、入居者にとっては、当たり前「暮らし」と「自分らしいより良い生き方」を支援してもらえ場所となった。

樋口氏は、自宅で家族に看取られるのが普通であり、「死」が身近に感じられていた昔とは異なり、多くの人が病院で最期を迎えている現在の状況に対して「できれば誰でも自分の住み慣れた場所で、最期まで過ごしたいですね。もともと日本にはお年



■たんがくの家 入居者の皆さんと共に



■たんがくの家 夏祭りイベントについて説明する樋口氏

寄りを見守り、看取る文化がありました。たんがくの家や上村座が、そういった文化を日常に取り戻すきっかけになればと思います」と語る。入居者およびその地域に住む人が、心穏やかに自分らしく生き、それぞれができることを生きがいに変え、共に支え合えるコミュニティをつくるということは、生きていく力を育てる地域づくり大きく貢献すると同時に、これらを担っていく医療・看護・介護従事者の心強い手本にもなっていくはずだ。

樋口千恵子氏は1976年に昭和大学医学部附属高等学校看護学校、1977年に神奈川県立看護教育大学校保健学科を卒業後、当時最先端の地域医療があるとされていた京都府の堀川病院に3年間勤務。その後、30年に亘り地元の久留米市内で保健師として、健康づくりや介護保険、介護予防などの地域に根差した健康・福祉活動に従事。介護保険制度や在宅医療の資源がない時代から地域医師会と連携を図り、終末期ケアを実践した。

樋口氏は、介護や延命治療などの自身の経験の中で「自宅で看取ることの難しさ」や患者さんを抱える「家族の負担」を目の当たりにし、家屋での終末期ケア「ホームホスピス」が必要だと感じて

ホームホスピス 普及に尽力

最期まで自分らしく生きるために



ひぐち ちえこ
樋口 千恵子
Chieko Higuchi

NPO法人 たんがく 理事長
Chairman, Nonprofit
Organization Tangaku

1977年神奈川県立看護教育大専攻保健学科卒業。訪問看護師として京都西陣健康会堀川病院で3年間、保健師として久留米市内で30年間勤務。2010年「NPO法人たんがく」を立ち上げ、2011年に久留米市初となるホームホスピス「たんがくの家」を開設。医療依存度の高い人や他施設で受け入れを断られた人も積極的に受け入れ、終末期ケアに尽力。2013年には、デイサービスや訪問看護などを提供する複合型サービス施設「上村座(かんむらざ)」を開設し、入居者と近隣で暮らす人々とのコミュニケーションの場の創設と活性化を実現した。

推薦者

坂本 すが
東京医療保健大学 副学長

清水 嘉与子
公益財団法人 日本訪問看護財団
理事長